

令和5年度 ウォーキング

「神通川の名残と 富山城址を巡る歴史散策」



令和5年6月11日(日)



蜷川体育協会



予 定（タイムスケジュール）

1

9:00 受付（蜷川小学校）

9:30 開会あいさつ

9:50 出発（蜷川小学校）

10:10 上堀駅到着

10:18 上堀駅発

10:35 電鉄富山駅着

10:45 ウォーキング開始

新富町

県庁公園前

舟橋北側常夜灯

舟橋



滝廉太郎修学の地

丸の内駐車場
（トイレ休憩）

富山城前



千歳御門

12:20 八人町公民館（昼食）

木町の浜



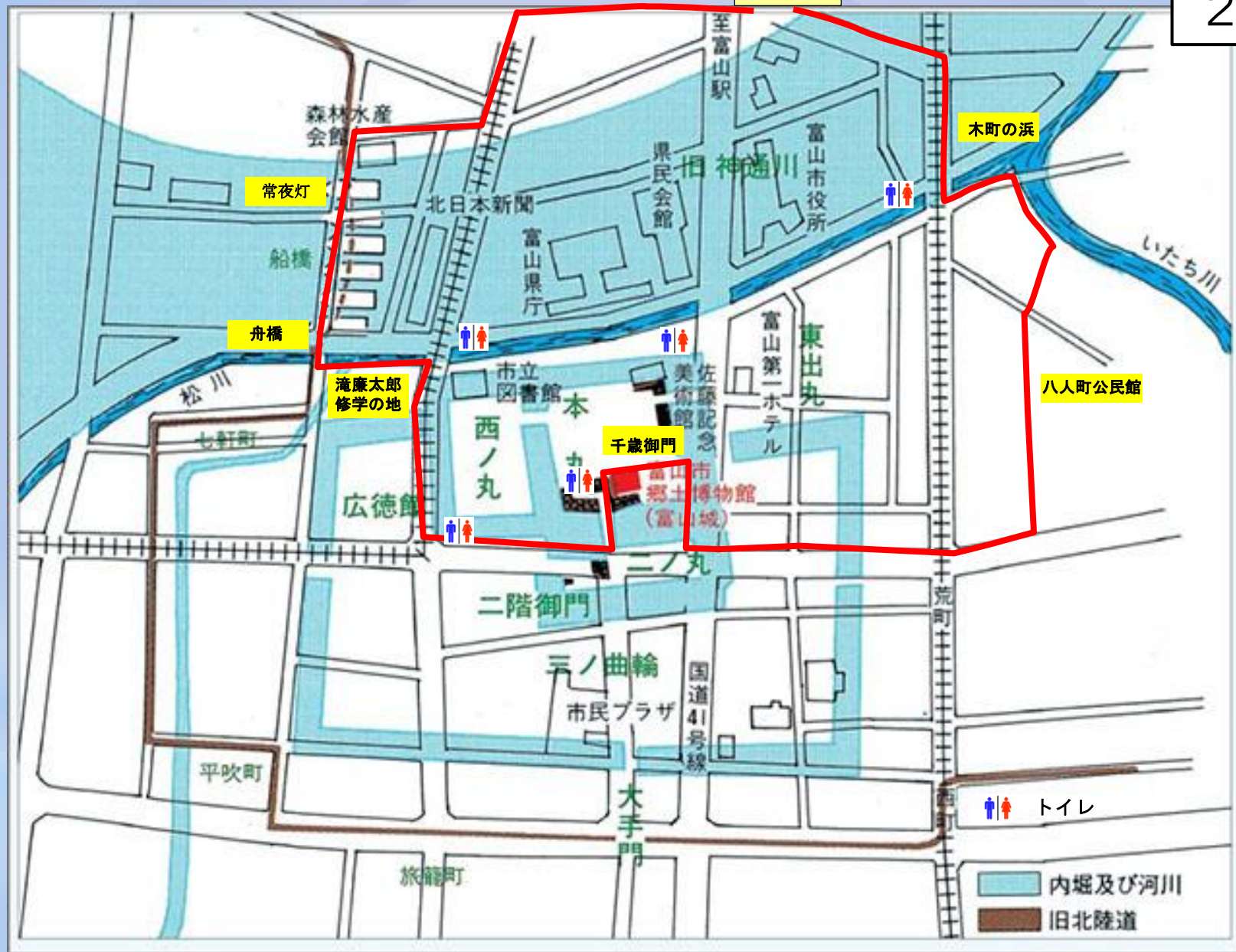
13:30 電鉄富山駅着

13:45 電鉄富山駅発

14:01 上堀駅着

14:20 蜷川小学校到着

14:30 解散



1. 松川は、かつての神通川

当時の神通川は現在の富山市内中心部を富山城の北側で大きく蛇行し流れていました。

しかし、湾曲しているために、堤防が決壊しやすく、毎年のように起こる氾濫は当時の人々を苦しめていました。

明治36年から、まっすぐ富山湾に注ぐようバイパス工事（馳越（はせこし）線工事※）が始められました。

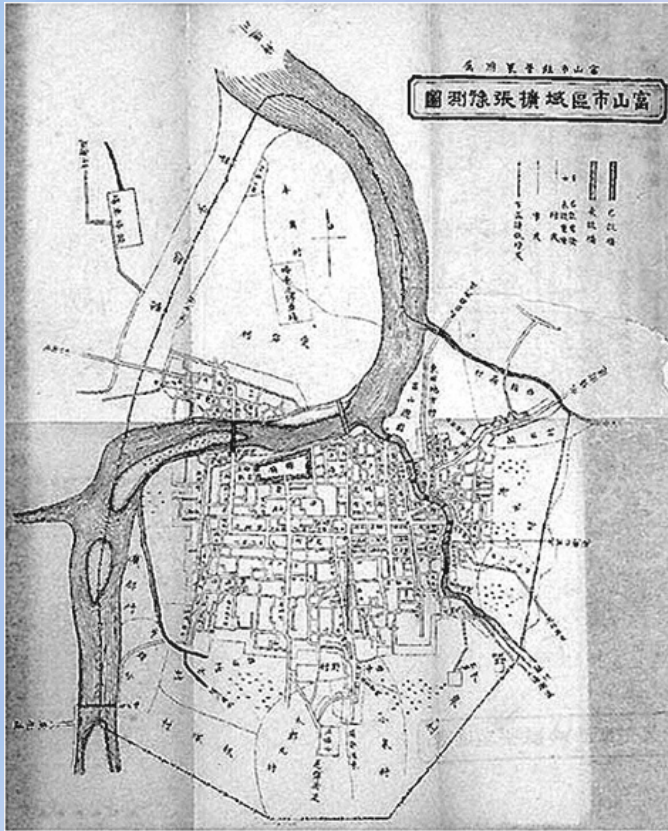


※馳越線工事とは

オランダ人技師 ヨハネス・デ・レーケが提唱した分流計画を基に、明治29年から第一期「川幅拡張工事」、第二期「馳越新設工事」、第三期「改良工事」と昭和12年まで三期に分けて行われた治水工事。

特に、第二期の「馳越線工事」は明治34年に着工され、蛇行する部分に真っ直ぐな幅2mの分水路「馳越線」を開削し、明治36年に完成しました。

その後、馳越線の川幅は水の流れを利用して少しずつ川幅を広げていく方法を取り、**大正3年8月14日に起きた大洪水**で、遂に旧流路にはほとんど水が流れなくなり、分水路の方が神通川の本流（現在の神通川）となりました。



馳越線工事による
拡張予測図

旧河道となった神通川は・・

河道は廃川地となり、当初は荒地のまましばらく放置されていましたが、昭和の初めに富岩運河を掘った時の土で昭和10年までに埋め立てられ、現在は県庁、市役所、電気ビルなどが建ち並んでいます。

右岸側約20mは残され、それが現在の松川となっています。

ここだけの話

ヨハネス・デ・レーケは、馳越線工事の計画を立案したものの、突然の出水による下流域や周辺域の氾濫の影響が甚大であると指摘をし、この案を薦めていませんでした。が、なぜかこの案が採用されました。実際、**大正3年の大洪水では93名の犠牲、多くの家屋が浸水、流失により被災しています。**

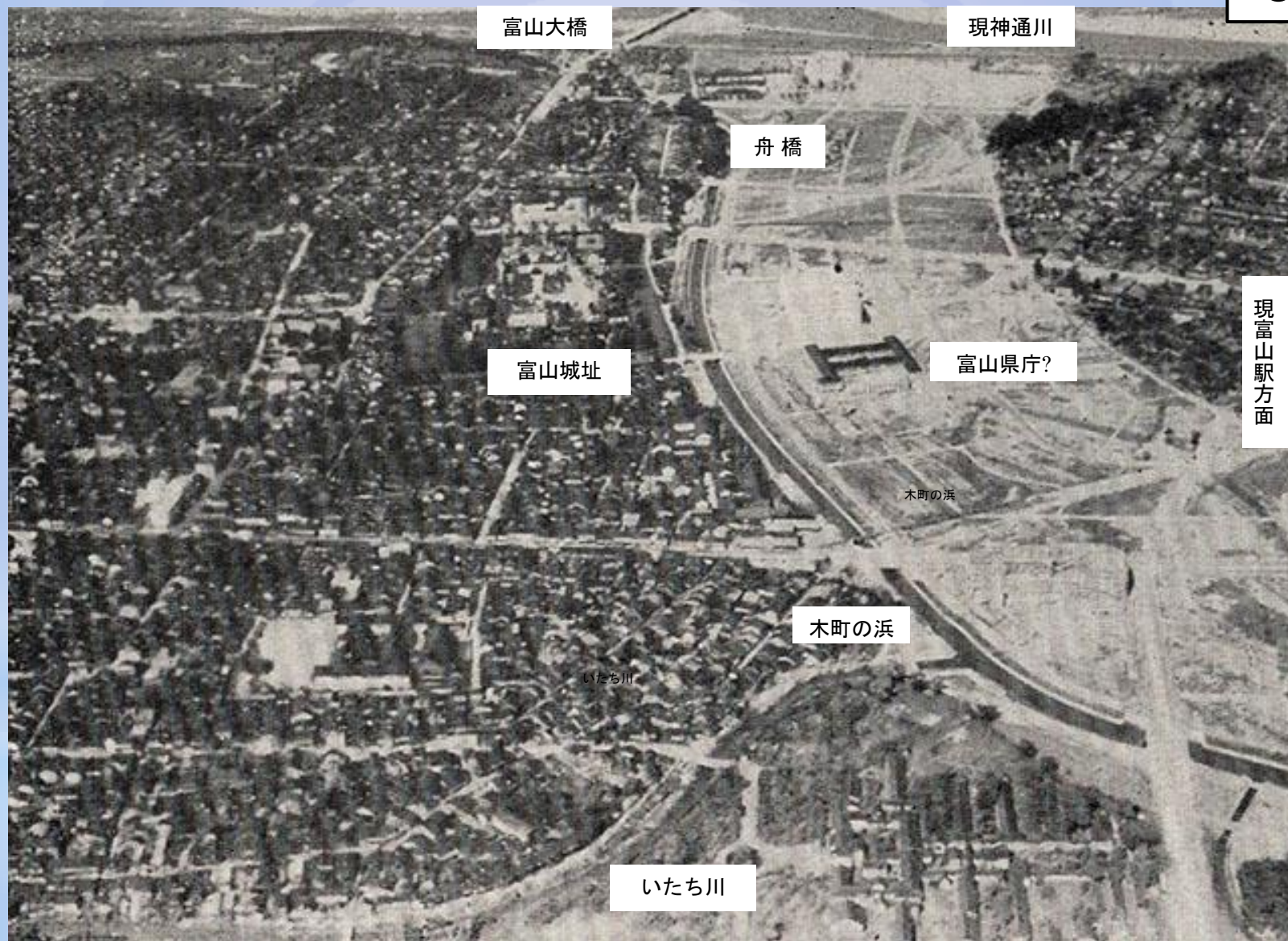
現在の松川

その後の松川は、ヘドロが溜まっていた時期もありましたが、清流が流れる環境河川として整備され、今に至っています。

現在、松川に流れている水は、実は**常願寺川から流れてくる河川が集まって構成**されています。神通川とは護国神社裏にある松川放水門、松川水門でつながっていますが、神通川から水が流れてくることはありません。

昭和初期の神通川廃川地の様子（所蔵：富山市郷土博物館）

国土交通省HPより



(参考) 現在の富山市 (黄色線・旧神通川の川幅)



(参考) 松川水門と松川放水門の位置



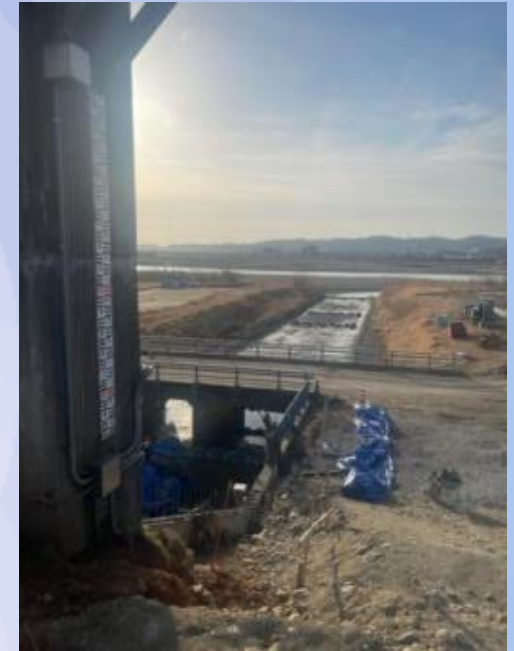
(参考) 松川放水門と松川水門



松川放水門（左）と松川（右）



松川放水門から神通川岸



松川放水門から神通川への放水路
(現在工事中)



松川水門（左）と松川
(護国神社側から下流)
右上、赤い水門は松川の下流



松川（上流側）と松川水門（左）

2. 舟 橋

日本一とうたわれた神通川の舟橋 ～64艘の渡し舟をつないだ橋～

神通川は富山平野の背後にそびえる飛騨地方の山々に水源を持ち、そこから一気に富山湾まで流れ込む、とても流れの速い川です。

特に春先ともなれば、大量の雪解け水で増水し、川幅は洪水のように両岸に広がり、橋の掛けにくい川でした。

「舟橋」を架けたのは前田利長が富山城下町を開いた慶長10年（1605年）の頃とされています。**当初は木町の浜付近に架けられましたが**、城下町を整備するにあたり、街道筋を現在の大和付近を通るように変更したため、今の場所に移されました。

はじめは32艘の舟を並べて、板を置いただけで、大水の時には舟橋を撤去し、水が引くと再び架橋しましたが、規模が拡大され、52艘の舟を太綱で繋ぎ、その上に木の板を3枚ずつ並べ、人を通らせました。

その後、太綱は激しい水流により鉄鎖2条になり舟も64艘になりましたが、橋から落ちて亡くなる人が絶えず、板は5枚に、更に7枚と増やされていきました。

北陸道では、新潟の親不知子不知ほどの通行の難所ではないにせよ、川の水流通次第では舟橋も命がけで通行しなければならない場所だったとは驚きです。

また、舟橋がこの地に移された後は、周辺に多くの茶屋の他、ます寿司の店が建ち並びました。

現在も数件ですが、この付近にます寿司の店があるのは当時の名残です。

舟橋の浮世絵

舟の上の板の数に注目



歌川広重「六十余州名所図会」より
出典：ウィキペディア



越中富山神通川船橋之図（松浦守美 画）
出典：(国交省HPより)

現在の舟橋

11



かつての舟橋北側の常夜灯（森林水産会館前）



現在の舟橋

ウィキペディアより



舟橋の歩道部分（北西側から）



舟橋南側（南東側）の常夜灯

3. 滝廉太郎修学の地

富山県尋常師範学校附属小学校（旧富山藩藩校・広徳館跡）

滝廉太郎は、「富山県尋常師範学校附属小学校」（現在の富山大学附属小学校；以下、附属小学校）に、1年生（明治19年）の途中から3年生（明治21年）の途中まで通っていました。

附属小学校は、旧富山城内の旧富山藩の藩校・広徳館の跡（現在の富山税務署のあたり）にありました。

廉太郎が通学していた当時は、廃城令により富山城内の建物が取り壊された後であること。松川が、当時まだ神通川で船での物資輸送が盛んだったこと。富山の地なので冬は雪が降り積もったこと。

これらは「荒城の月」、「花」、「雪」の作曲のイメージにつながったのではないかとされています。

「荒城の月」、「花」は、廉太郎がベルリンに留学の際に「箱根八里」、「鳩ぽっぽ」、「お正月」とともに作曲したものです。

荒城の月は、大分県竹田市の岡城跡をイメージしたとも言われていますが、廃城後の富山城内そばの附属小学校に通学していた廉太郎が、生まれて初めて富山城内に立ち入り、城跡を焼き付けたイメージが参考になったかもしれません。

「花」の歌詞には「隅田川」と歌われていますが、廉太郎が通っていた附属小学校の近くを流れる当時の神通川の船の往来がイメージとして残っていたのでは、とも言われています。

富山での通学は約2年という短い期間ではありましたが、滝廉太郎を代表する曲が富山にいた頃をイメージして作曲されたのではないかと、思うと慣れ親しんだ曲が更に身近に感じます。



滝廉太郎修学の地にある像
（丸の内合同庁舎北側）

4.富山城

13



Q：現在の富山城は、昔の富山城と同じ造り？

A： 結論から言うと、同じではありません。富山城自体は明治時代の廃城令で取り壊されており、現在の城は1954年（昭和29年）城址公園内で開催された富山産業大博覧会に合わせて建てられた三大シンボル建築物※の一つとしての展示会場で、現在は富山市郷土博物館になっています。

※他の三大シンボル建築物・前富山市庁舎（左下）・富山市公会堂（当時:右下）



現在の富山城は彦根城を参考に建てられ、模擬天守（天守は複合連結式望楼型3重4階、小天守は2重2階）で構成されています。

また、現在天守として建っている位置は本来は櫓の場所で、天守が建てられる場所ではありません。江戸時代の古図にはいずれも天守建設の記載がなく、発掘調査の結果からも本丸南東隅に天守土台となる土居の拡張工事は確認できたものの、石垣工事の痕跡がないため、天守は築かれなかったとされています。

5. 千歳御門（ちとせごもん）

富山城址公園内にある歴史的建造物で、富山城唯一の現存建築遺構で、もともとは埋門（うずみもん）と呼ばれていました。

千歳御門は、嘉永2年（1849年）に第10代藩主前田利保が隠居のために富山城内に造営した千歳御殿の正門として建てられました。安政2年（1855年）の大火で千歳御殿が焼失した際、千歳御門は免れ残ったと考えられています。

明治5年（1872年）に「廃城令」とともに千歳御殿が解体された際、千歳御門は富山市米田の豪農への払い下げにより移築されましたが、そのおかげで元の場所を襲った大火や空襲を免れることができました。

平成17年（2005年）に所有者が富山市に寄贈し平成18年（2006年）から平成20年（2008年）にかけて富山城址公園内の現在の地に移築され、平成24年（2012年）4月より常時開門を開始して、千歳御門は城址公園の新たな玄関口となりました。

千歳御門が元々建造された場所は、富山市桜木町の、現在より東に約100メートル離れた場所で当時は西向きに建てられていました。（現在の千歳御門は東向きに建てられています。）

門は総櫓（けやき）造り。門形式は三間薬医門（さんげんやくいんもん）といわれる格式の高い城門建築で、**現存する同形の門は、東大の赤門**（旧 加賀藩江戸上屋敷御守殿門）だけとされており、江戸時代の貴重な建築様式を今に残しています。

千歳御門

15



城址公園側より



道路側より



(参考) 東京大学赤門



6. 木町の浜



木町の浜の常夜灯

旧神通川といたち川が合流する、現在の本町一帯は、飛騨地域からの木材が神通川によって川流しされ、引き揚げて貯蔵し、また舟に積み、回送していました。この地が木材の集散地だったことから「木町の浜」と呼ばれました。

また、海からは北前船の物資も遡上し、木材のみならず物流の拠点として発展しました。

常夜灯は、木町の浜の目印としての当時の名残です。

ここだけの話

舟橋が架けられる前の神通川には「舟渡し」がありました。「舟渡し」が設置されたのは、富山城が築城された天文年間とされています。(天文年間は1532年から1555年、室町時代後期)

その後の城主 佐々成政も五艘の舟を設けて舟渡しの便宜をはかり、船賃を徴収していました。

神通川の近くに「五艘（ごそう）」という地名がありますが、当時の「五艘の渡し舟」に由来していると言われています。

最初に舟橋が架けられたのは、木町の浜付近でしたが、城下町整備に合わせて街道も整備し、現在の場所に移動しました。



現在の木町の浜
松川遊覧船HPより